

## おわりに

暫定的成果は、次の3点に集約される。

1. 循環型社会の構築：低炭素社会のような国の枠を超えた横軸としてのキーワードは、地球人あるいはコスモポリタンとして共通にもつべき行動指針となる。生産と共に消費にもかかわるわれわれ人間は、社会を構成する基本要件になっている。欲しいときにモノが足りないと、機会損失が発生する。その損失を回避するために需要を上回る供給ルートを確認する。これが余剰流通、余剰在庫、余剰販売、余剰購入などの“余剰”行動を生み出す。

強欲な消費者を顧客とし、その顧客を第一優位者として彼（女）らの欲求を満たすための生産者、そしてそれらの消費者・生産者をブラックボックス化した状態で支え続ける関連業者の織りなす“饗宴”は、まさしく毎日が酒池肉林の世界に近い。ときにその消費者・生産者・関連業者は同一人なのが、何と表現し説明すればよいのだろうか。典型的な事例をイメージしてみよう。

限界を超えた消費・生産活動は自ら恒常的な病理現象を創り、それらの新奇な病を治癒するために葉漬け、病院通いを続ける。飽食の結果生まれたメタボを部分的に解消するために各種スポーツジムに通い汗を流す。室内で走らない自転車に乗り汗をかく。あげくの果てに、喉がかわいたので楽しい仲間と一杯。メタボ解消どころかメタボ生成のために有料の施設で汗をかいている。これを“悪”循環といわず何というべきなのであろうか。ビッグデータに走り、一般論に酔っているのではなく、むしろスモールデータのもつ意味を考えた本質論の土俵にたつべきであろう。

貿易にはモノの移動が伴うので、何らかのエネルギー使用が発生する。しかしそのエネルギーも消費段階で消費されずに廃棄される部分があるとすると、まったくの無駄になる。誰にでもわかる単純な計算が先進国中心にできないでいる。今回分析が十分にできなかったけれども、先進国中心に年間で7,000万トンの食品が廃棄されているという調査結果が出されてい

る（『ナショナル ジオグラフィック』2014年11月号、114ページ）。10トントラックで実に700万台という数値になる。わが国の鉄道距離の総延長の長さに例えてみよう。青森から博多までの総距離がおおよそ1889km、10トントラックの長さがおおよそ5mとする。全体での長さは700万台なので $7,000,000 \times 5 = 35,000,000\text{m}$ の道路が必要となる。ところが日本列島全体で1,889,000mしかないので、地球上の食べ物で食べられずに捨てられている食料を廃棄するためのトラックが、青森から博多までの距離を年間で18.5倍必要とする。これに実消費されている食料が加わる。道路がすし詰めどころかトラックを動かすことすらできない。

これが近代国家の現実である。逆説的な言い方をすれば、捨てるために生産し、流通させ、在庫し、販売している製品や商品部分がかかなりあることを意味する。先の数値には家庭用の他に事業用も含まれているので、循環を共同でできるところから企業でも家庭でも個人でも始めることが可及的速やかに求められている。

2. パラドックスの許容：分かりやすいのはモノゴトの仕組みを単純化することによって個人の理解度を高めることにあるかもしれない。しかし単純化はある意味、環境そのものを自分たちの都合のよい範囲に切り取ることになる。自己満足の世界は人間同士のみならず他の生きものとの関係にも配慮が希薄になる。自分の可能性範囲を限定することによって自己都合での満足度が高まる。単純化がさらに進み、同質化や一様化で覆われた無機質な要素で覆われる。そこに在る (being) だけでは生きている意識は少なくとも薄れる。在る を超えた 成る (becoming) の行動様式が求められる。

マイクロマクロやクローズドーオープン、利己ー利他、同質ー異質、一様ー多様、単純ー複雑、私有ー共有のような 相反する要素の相互理解が必須となる。ある意味では、相補の方法論が有効となる。

パラドックスは車のブレーキとアクセルで明らかのように、マイクロの世界でそれ自体の性能や機能を競ってもほとんど意味がない。最終的にはむしろ相互破壊への途を歩むことになる。スピードを出す機能と殺す機能は自動車という上位概念にとって共に必要となる。

生と死、愛と憎しみ、平和と戦い、朝と夜などは、生を営む生きものすべ

てに嫌でもついてまわる。残念ながら回避はできない。ホモサピエンスといえども、パラドックスから逃れることはできない。だとすればわれわれ人間という生きものにとって可能なことは、パラドックスを排除することではなく、共生する途を探すことなのではないだろうか。それはアクセルとブレーキにとっての自動車のように、当事者同士のいがみ合いではなく、それらの個別機能を超えた第三の道を模索することであろう。

モノラル同士の機能の競い合いからは、ステレオは生まれない。次元同士の智恵では三次元はうまれない。発想を転換し、部分最適はマイクロの世界で試行し全体満足はマクロの世界で試行することは1つの方法になるかもしれない。有機体のもつ相補の哲学が有効かもしれない。

3. 過程指向：達成すべき目標が明示化されているときは、目的指向に全資源を集中しムダ・ムリ・ムラを排除する方法が有効である。しかし目標が曖昧であっても行動を起こすことが要請される状況は日常茶飯事で起る。またある状況を前提にして事前にたてた目標が途中で大きく変化することもよくおこる。買い物行動や食堂でのメニュー選びなどを想定すれば理解できよう。神ではない人間のやることなので企業行動や国の戦略行動でも同じであろう。

このような曖昧度の高い状況下では、明示的な意思決定や資源準備をあらかじめ決めておくことは非現実的である。残された唯一の方法は、応用が利くような日頃の準備運動を、恒常的に進めておくことであろう。言い換えれば過程（process）の選択肢設計にできる範囲でエネルギーを注ぐことが肝要となる。

過程指向では範囲が限定されないので、つまり目標そのものが曖昧なので、基本的にオープンシステムとなる。現実にて得意としている技やアイデアなどは、一味異なった異質・多様・複雑性を事後に生み出すことを可能にする。逆の言い方をすれば、ある種のムダを承知の上で、有意なムダを許容することが過程指向では重要となる。マニュアルや手順書で判断・行動することは効率性やある程度までの専門性を身につけるのには有用かもしれない。しかし標準性ではない特異性や目に見えにくい本質性を追究するときには、むしろ妨げとなる。一度、標準性を脇に置き、未知なる道の探索に発想を転換す

るのも一理あろう。

猪突猛進型の行動や逃げ場のないトンネル、運河のなかにいることを認識した段階で、外界情報の入手方法を探すオープンな発想が求められよう。

この共同プロジェクトの主題は、国境を超えた環境経営である。国境も環境も経営も共に、開放が共通認識となる。そして地球という棲み家の住人であるホモサピエンスは、その棲み家を守るためには資源を“独り占め”する愚かな行動を速やかに止め、“共”や“協”を同、動、働することを生きることの底辺におくことが必要となろう。しかも同時にミーイズムの権化である“コモنزの悲劇”の回避を意識しながら。

反省と課題を最後に付しておきたい。①研究者の定住地区が韓国と日本とに分かれているため、頻繁に会って情報の交換をすることが十分にできなかった、②日本側の代表者が研究期間中、原因不明の病に侵され研究進行過程を確認するのに必要な時間が十分にとれなかった、③そればかりでなく研究成果をまとめることもできなかった。特に③については、言い訳は許されない。体調が戻り次第、時期を改めて執筆し、成果責任を果たす予定である。研究機会を与えていただいたことを感謝すると同時に執筆作業が大幅に遅れたことを関係各位に深謝しながら…。